

福岡城跡

- 第75次調査報告 -

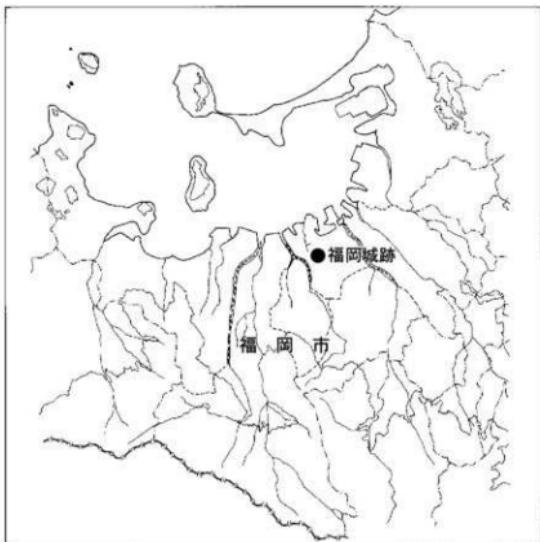
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1402集



2020
福岡市教育委員会

ふくおかじょうあと
福岡城跡

- 第75次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1402集



調査番号 1714
遺跡略号 FUE-75

2020
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えていた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書は、事務所ビル建設に伴う福岡城跡第75次発掘調査について報告するものです。福岡城は筑前福岡藩の初代藩主黒田長政が築城した広大な城で現在は大部分が舞鶴公園として市民に親しまれています。今回の調査地点では中・上級藩士の屋敷地の一角を発見し、それを裏付けるような多くの陶磁器をはじめ、都市生活の痕跡を示す数多くの文化財が発掘されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました株式会社ワイテック様をはじめ、関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　言

- 本書は、福岡市中央区大濠公園 56, 59 の事務所ビル建設に伴い、福岡市教育委員会が 2017 (平成29) 年 7 月 11 日から 10 月 20 日にかけて発掘調査を実施した福岡城跡 (ふくおかじょうあと) 第75次調査の報告書である。
- 遺構の呼称は記号化し、溝→S D、井戸→S E、土坑→S K、ピット→S P、その他→S Xとした。遺構番号は種類に関係なく連番とした。
- 本書に使用した遺構実測図は野村俊之、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は林田恵三、久富美智子、元田晃子が作成した。また、製図には立石真二、野村美樹、元田、萩尾朱美、篠田千恵子、増永好美、田上があたった。
- 本書に使用した写真是田上が撮影した。
- 本書に使用した標高は海拔高である。
- 本書に使用した方位は座標北である。
- 本書の編集・執筆は田上が行った。
- 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	1714			遺跡略号	FUE-75
調査地地籍	中央区大濠公園56, 59			分布地図番号	舞鶴 60
開発面積	298.37m ²	調査対象面積	225m ²	調査面積	204m ²
調査期間	2017 (平成29) 年 7 月 11 日 ~ 10 月 20 日				

目 次

Iはじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	2
II調査の記録	3
1. 調査の経過	3
2. 第1面の調査	3
3. 第2面の調査	3
4. 第3面の調査	6
5. 第4面の調査	24
IIIまとめ	26

図版目次

Fig. 1	福岡城と調査地点の位置 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査地点の位置 (1/4,000)	2
Fig. 3	調査区域図 (1/400)	2
Fig. 4	第1面遺構分布図 (1/120)	3
Fig. 5	第2面遺構分布図 (1/120)	4
Fig. 6	第3面遺構分布図 (1/120)	6
Fig. 7	S X 3 0 3 実測図 (1/40)	7
Fig. 8	S X 3 0 3 出土遺物実測図 1 (1/3)	8
Fig. 9	S X 3 0 3 出土遺物実測図 2 (1/3)	9
Fig. 10	S X 3 0 3 出土遺物実測図 3 (1/3)	10
Fig. 11	S X 3 0 3 出土遺物実測図 4 (1/3)	11
Fig. 12	S X 3 0 3 出土遺物実測図 5 (1/3)	12
Fig. 13	S X 3 0 3 出土遺物実測図 6 (1/3)	13
Fig. 14	S X 3 0 3 出土遺物実測図 7 (1/3・拓本拡大1/1)	14
Fig. 15	S X 3 0 3 出土遺物実測図 8 (1/3)	15
Fig. 16	S X 3 0 3 出土遺物実測図 9 (1/3)	16
Fig. 17	S X 3 0 3 出土遺物実測図 10 (1/3)	17
Fig. 18	S X 3 0 3 出土遺物実測図 11 (1/3・1/4)	18
Fig. 19	S X 3 0 3 出土遺物実測図 12 (1/3)	19
Fig. 20	S X 3 0 3 出土遺物実測図 13 (1/3・1/4)	20
Fig. 21	S X 3 0 3 出土遺物実測図 14 (1/4)	21
Fig. 22	S X 3 0 3 出土遺物実測図 15 (1/4)	22
Fig. 23	S X 3 0 3 出土遺物実測図 16 (1/4)	23
Fig. 24	S X 3 0 3 出土遺物実測図 17 (1/3・1/4)	24
Fig. 25	第4面遺構分布図 (1/120)	25

写真目次

Ph. 1	第1面全景(南から)	3
Ph. 2	S E 2 1 3 (南から)	3
Ph. 3	S K 2 5 8 (東から)	4
Ph. 4	北側第2面全景(南から)	5
Ph. 5	南側第2面全景(北から)	5
Ph. 6	西南側第2面全景(東から)	5
Ph. 7	西北側第2面全景(東から)	5
Ph. 8	北側第3面全景(南から)	5
Ph. 9	南側第3面全景(北から)	5
Ph. 10	西南側第3面全景(東から)	5
Ph. 11	西北側第3面全景(東から)	5
Ph. 12	S K 3 1 2 (東から)	6
Ph. 13	S X 3 0 3 北側(西から)	8
Ph. 14	S X 3 0 3 南側(西から)	8
Ph. 15	S X 3 0 3 遺物出土状況 1	8
Ph. 16	S X 3 0 3 遺物出土状況 2	8
Ph. 17	S E 4 0 1 (南から)	24
Ph. 18	S E 4 0 1 木桶(南から)	24
Ph. 19	S X 4 0 5 (西から)	25

I　はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は2017（平成29）年2月22日付で、株式会社ワイティックより、福岡市中央区大濠公園56番、59番における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を受理した。

これを受けて経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である福岡城跡の範囲内であり、2014（平成26）年7月14日に行われた確認調査で遺跡が発見されていた結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を行い、建築工事によって影響がある部分を対象に本調査を実施することで合意した。

その後、2017（平成29）年7月6日付で株式会社ワイティックを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年7月11日より調査を開始した。調査では予想以上の土器・陶磁器が出土したため、予定の9月21日に終了できずに10月20日まで延長をお願いした。

資料整理および報告書作成は2018・2019（平成30・31・令和元）年度に行った。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 株式会社ワイティック

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成29年度・資料整理：平成30・31・令和元年度）

調査総括 福岡市経済観光文化局文化財部（30年度より文化財活用部）

埋蔵文化財課	課長	常松幹雄（29年度）
	調査第1係長	吉武 学
庶務 文化財保護課	管理調整係長	藤 克己（29年度）
	管理調整係	松尾智仁（29年度）
文化財活用課	管理調整係長	藤 克己（31・令和元年度）
		松原加奈枝（31・令和元年度）
事前審査 埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎
	事前審査係主任文化財主事	池田祐司（29年度）
	事前審査係文化財主事	田上勇一郎（30・31・令和元年度）
		中尾祐太（29・30年度）
調査担当 埋蔵文化財課	調査第1係主任文化財主事	朝岡俊也（30・31・令和元年度）
整理担当 埋蔵文化財課	事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（29年度）
		田上勇一郎（30・31・令和元年度）

3. 調査地点の立地と環境

福岡城は徳川家康より筑前国を拝領した黒田長政が、博多湾に面して北に延びる丘陵を中心に慶長6(1601)年から7年の歳月をかけ築城した巨大な城郭である。

今回の調査地点は福岡城の北西に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地「福岡城跡」に含まれるが、絵図によると上・中級家臣が暮らす城下町にあたる。また、南側には大堀との境に「杉土手」が築かれている。この土手は現在も道路と大濠公園・能楽堂との境に残存している。

各年代の絵図には居住者の名前が見られる。福岡市博物館宮野弘樹氏によると、寛文元(1661)年~9(1669)年ごろの福岡城下屋敷図には「英權左衛門」、元禄12(1699)年~正徳6(1716)年ごろの福岡御城下絵図には200石の「梶原源三郎」、正徳3(1713)年~延享2(1745)年ごろの福岡御城下絵図には「川越六之丞」、延享3(1746)年ごろの分間福府絵図には「梶原(名不詳)」、安永6(1777)年の福岡御城下絵図には「井上六之丞」、享和2(1802)年~文化元(1804)年ごろの福岡城下町・博多・近隣古図には「井上平次」、安政2(1855)年の筑武鑑には150石の「宮本安十郎」の名が見えるという。

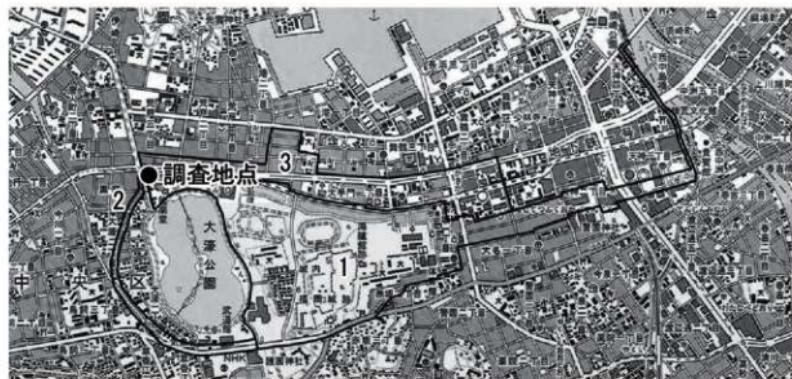


Fig. 1 福岡城と調査地点の位置 (1/25,000)

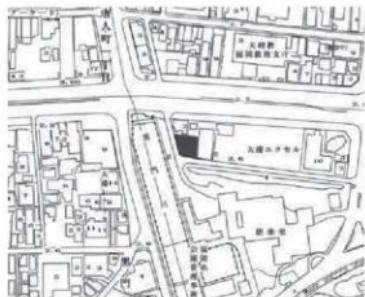


Fig. 2 調査地点の位置 (1/4,000)

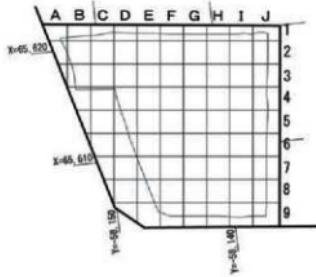


Fig. 3 調査区域図 (1/400)

II 調査の記録

1. 調査の経過

調査で発生する排土置き場を確保するため、北・南・西の3分割で調査を行うこととした。測量用グリッドは敷地にあわせ2m四方に設定し、アルファベットと数字で位置を示した。

2017(平成29)年7月11日に北側より重機による表土掘削を行い、7月12日より作業員による発掘調査を開始した。搅乱が激しく、第1面は北東隅のごく一部にとどまった。7月18日から第2面、7月26日から第3面の調査を開始した。第3面では大型の廃棄土坑SX303が半分かかり、かなりの時間を費やした。8月21日に第3面を終了し、土層観察のために掘り下げを行ったところ、地山の砂層を切り込む井戸が発見されたため、急遽第4面を設定し、調査を行った。重機により8月23・24日に北側調査区を埋め戻し、南側調査区の表土除去を行った。28・29日に第2面の調査を終え、30日から第3面への掘り下げ、北側調査区で発見されていた大型廃棄土坑SX303の残りの調査を開始した。SX303は北側調査区と同程度発見され、掘り上げるまでに時間を要した。9月19日からはSX303調査と並行して第4面への掘り下げを開始した。重機により10月5・7日に南側調査区の埋め戻し、西側調査区の表土除去を行った。10月10日より作業員による発掘調査を開始し、第2~4面の調査を行い、10月20日に機材を撤収、重機により埋め戻しを行い現地での作業を終えた。

2. 第1面の調査

搅乱が広がっていたため、第1面は調査区北東部のごくわずかにとどまる。標高は2.3mである。近代以降のピットが4基発見されたのみである。

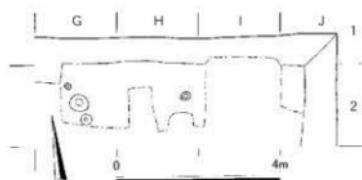


Fig.4 第1面遺構分布図 (1/120)



Ph.1 第1面全景 (南から)

3. 第2面の調査

第2面は第1面が残っていた北東部を除き、搅乱を除去した面である。標高はおおむね1.9mである。井戸1基、溝1条、土坑19基、ピット多数が検出された。

SE214は近代の井戸で、直径50cmの土管を3段積み上げ井側とする。最上段の土管は上部が失われ、残存高は40cm、中央は50cm、下段は55cmある。水溜は桶であり、径は42



Ph.2 SE213 (南から)

cm、高さは78cmである。14枚の板で組まれてあり、上部から10cm下に桶を締めたタガが残る。

S D 2 1 0 と S D 2 4 4 は同一の溝であろう。幅70~90cm、深さ30cm。座標北から32°東偏し、城下町の町割りとは一致しない。

S K 2 1 2 · 2 1 5 · 2 2 0 · 2 5 8 · S X 2 3 9 には礎板石、栗石が据えられており、大型建物の柱穴とみられる。S K 2 5 8 には径10cmの柱根も残っていた。S K 2 1 2 · 2 1 5 · 2 5 8 の組み合わせで建物が建ちそうであるが城下町の町割りとは一致しない。



Ph.3 SK 258 (東から)

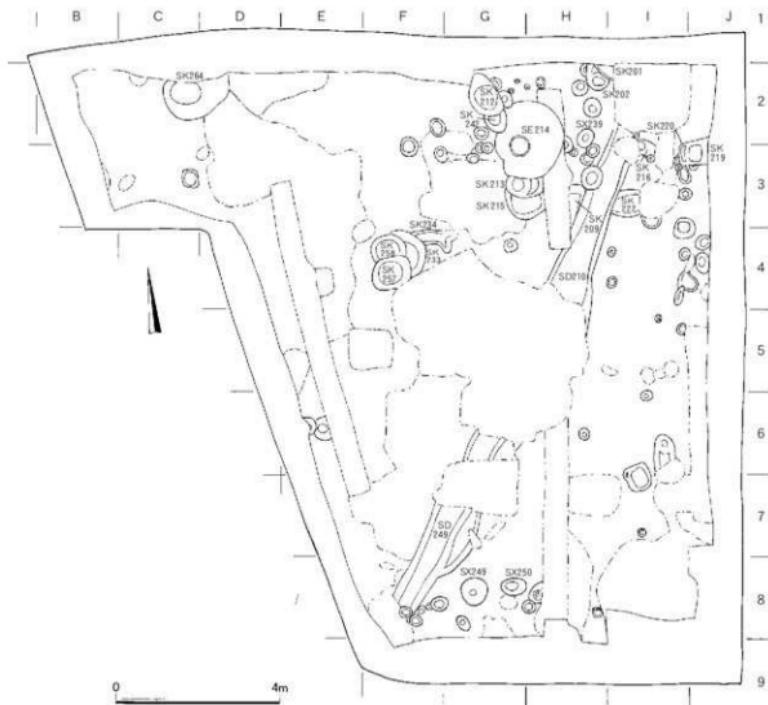


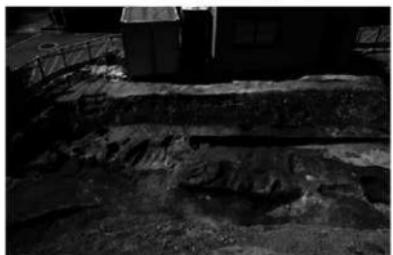
Fig.5 第2面遺構分布図 (1/120)



Ph.4 北側第2面全景（南から）



Ph.5 南側第2面全景（北から）



Ph.6 西西南側第2面全景（東から）



Ph.7 西西北側第2面全景（東から）



Ph.8 北側第3面全景（南から）



Ph.9 南側第3面全景（北から）



Ph.10 西西南側第3面全景（東から）



Ph.11 西西北側第3面全景（東から）

4. 第3面の調査

第3面は標高1.7m~1.9mに設定した。溝1条、土坑9基を検出した。大型の廃棄土坑SK303や方形の土坑SK305・313などがある。SK303は別に詳述する。

SK305は東西2.2m、南北2.9m、深さ85cm、SK313は東西4.2m、南北2.0m以上、深さ65cmでどちらも方形を意識して掘られており、地下蔵であろう。主軸も城下町の地割にほぼ一致している。焼土塊・炭化物塊を多く含む、黒色土・黒褐色土で埋められている。

SK312は長軸3.2m、短軸2.2m、深さ60cmの橢円形土坑で、瓦を中心に陶磁器などが廃棄されている。



Ph.12 SK312 (東から)

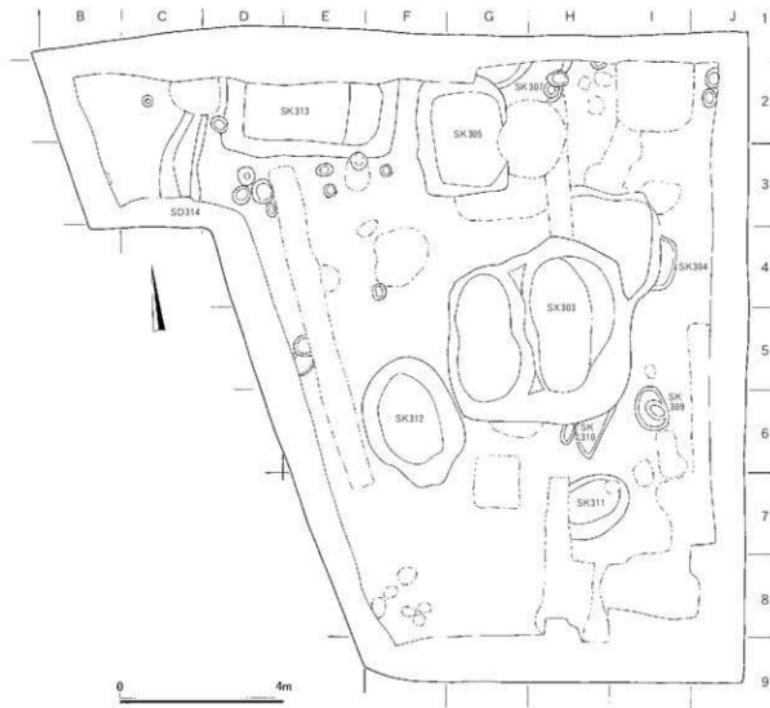


Fig.6 第3面遺構分布図 (1/120)

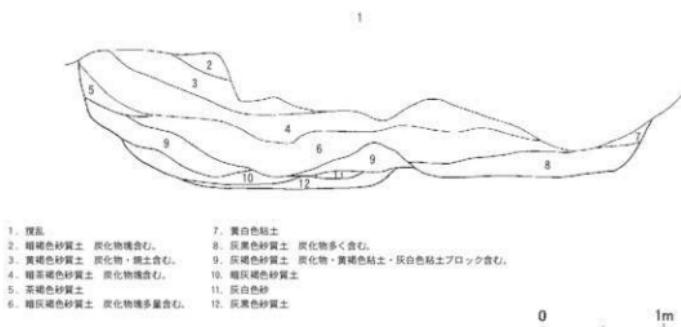


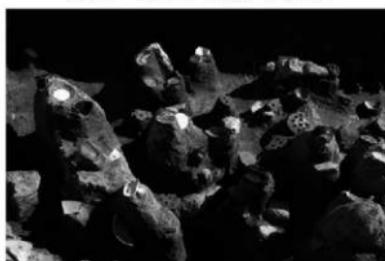
Fig. 7 SX 303 実測図 (1/40)



Ph.13 SX 303北側（西から）



Ph.14 SX 303南側（西から）



Ph.15 SX 303 遺物出土状況 1



Ph.16 SX 303 遺物出土状況 2

S X 3 0 3

北側調査区で北半分、南側調査区で南半分を調査した。一辺4.5mの隅丸方形を呈する。深さは1m前後である。底部は南北方向に高まりがみられ、東西に分かれれるが土層からは同時期の埋没である。また、北東部は東西2m、南北3m、深さ35cmほどの落ち込みがある。西側上層部は搅乱で失われている。

多くの土器・陶磁器が出土した。その一部を以下に説明する。

1は中国漳州窯の青花皿。見込みに团龍文を描く。外底に粗砂粒が付着する。

2～9は肥前の白磁である。2・3は小碗、4・5は碗。6・7は小皿。8は紅皿。9は皿。

10は肥前の青磁香炉である。11～13は肥前の青磁染付である。11・12は蓋。12は口縁を口紅とする。13は碗。口縁を口紅装飾とする。見込みに五弁花のコンニャク印判。高台内に「大明年製」の

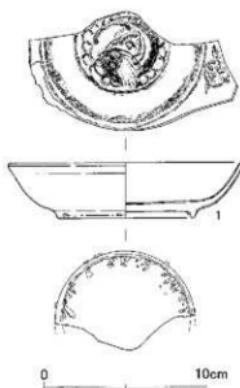


Fig. 8 SX 303 出土遺物実測図 1 (1/3)

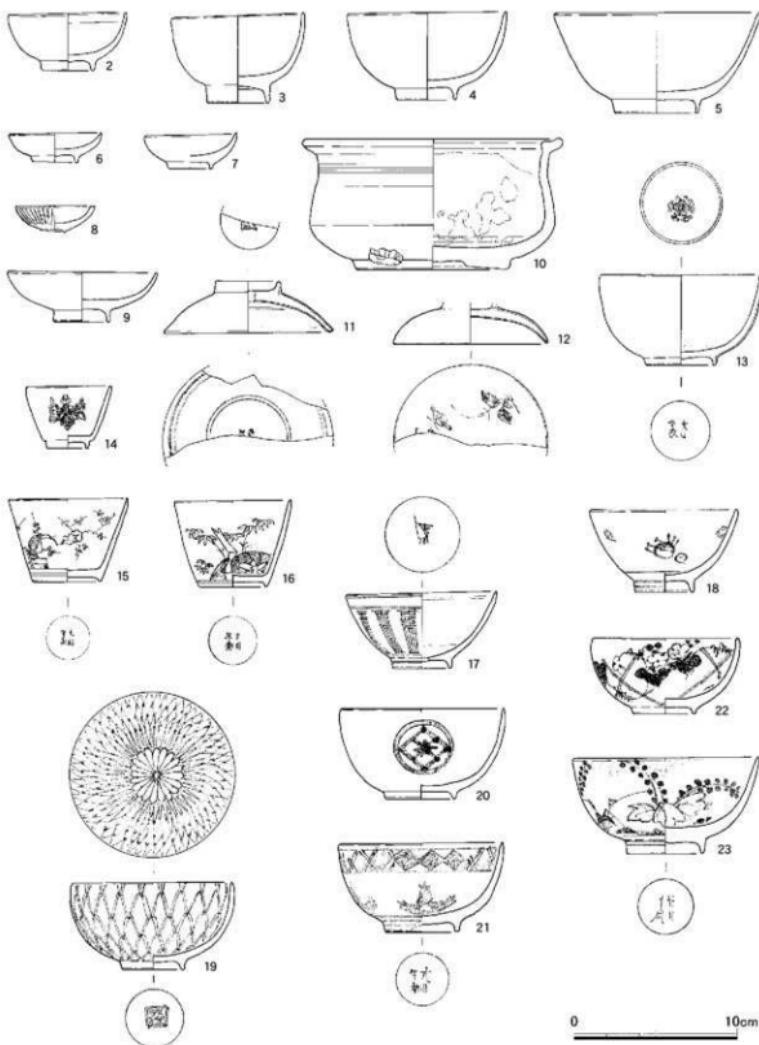


Fig. 9 SX 303 出土遺物実測図 2 (1/3)



Fig.10 S X 303 出土遺物実測図 3 (1/3)

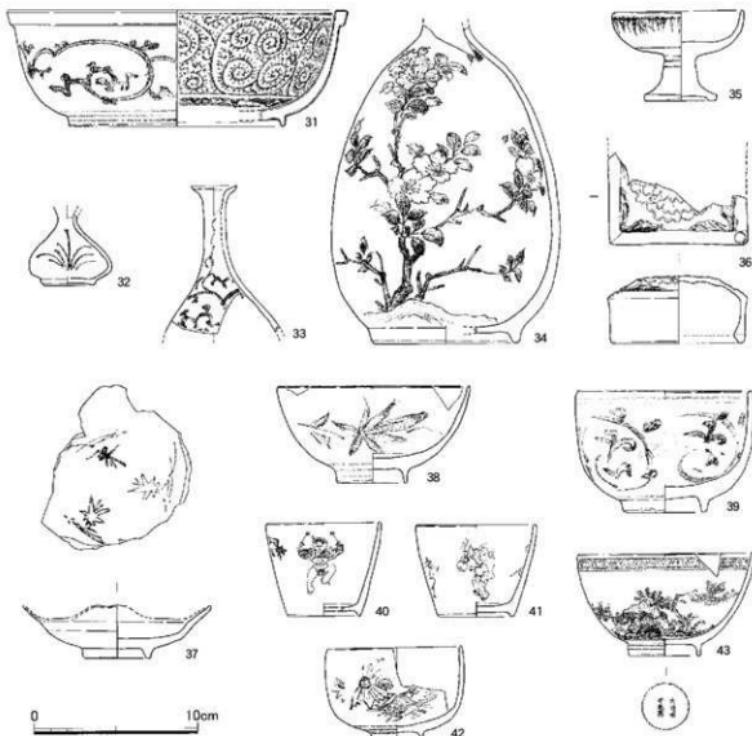


Fig.11 S X 303 出土遺物実測図 4 (1/3)

銘。

14~39は肥前の染付である。14は盃。外面三方にコンニャク印判による桐文。15・16はそば猪口。外面に樹木などを描く。高台内に「大明年製」の銘。

17・18は小碗。17は見込みと外面に壽文、18は外面に宝珠を描く。19~23は丸碗。19は見込みに菊花文、内面に一重網文、外面に二重網文、高台内に渦福の銘。20は外面四方に丸に菱文を描く。21は外面体部にコンニャク印判による若松文を5か所と口縁下に三つの菱文を4か所に施し、菱文の間は手描きによる四方禪文。高台内に「大明年製」の銘。口縁直下の圈線一本は鉄絵による。22は外面に草花と蝶を描く。23はやや大振りで外面に草花と蝶を描く。高台内に四字の銘が描かれるがくずれて文字になっていない。24は広東碗。見込みに十字花文、外面は縱方向に区画し樹文と幾何学文を交互に入れる。25は体部が直線的に開く碗で内面に蝶と梅桜文を描く。26は大碗。見込みに五弁花のコンニャク印判、外面に草花文、高台内に「大明年製」の銘。

27~30は皿。27は口縁を輪花とする。内面に手描きの五弁花と唐草文、外面に唐草文を描く。唐草

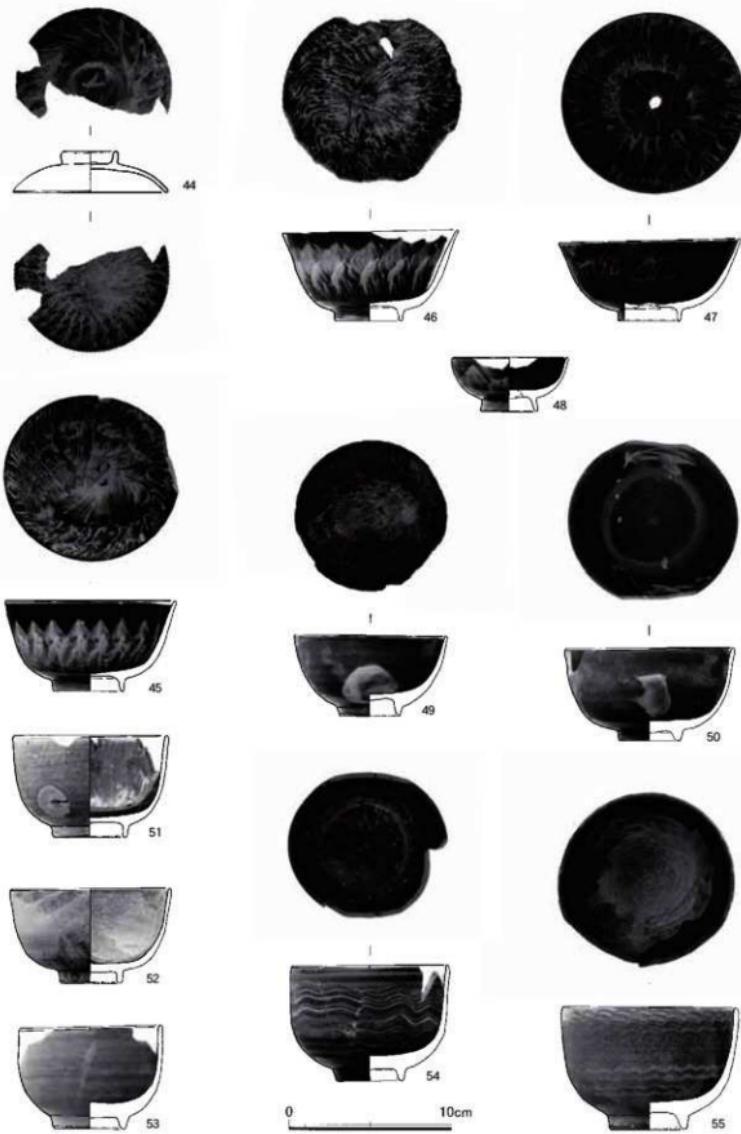
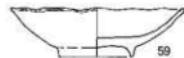


Fig.12 SX303出土遺物実測図 5 (1/3)



0 10cm

Fig.13 SX 303出土遺物實測圖 6 (1/3)

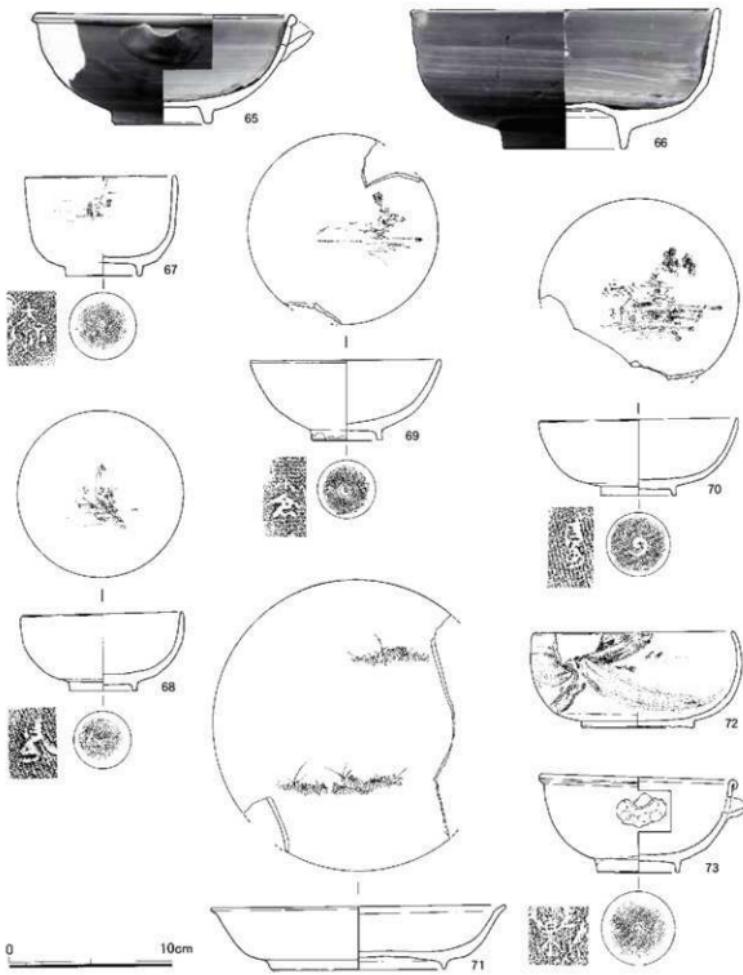


Fig.14 SX 303 出土遺物実測図 7 (1/3・拓本拡大 1/1)

は茎の輪郭を線描きし、濃みを入れる。高台内に渦福の銘。28は深めの皿。口縁に口紅装飾を施す。内面は五弁花のコンニャク印判と松竹梅文、外面は線描きの唐草文、高台内にくずれた「大明年製」の銘。29は内面に蛸唐草文、外面に唐草文を描く。高台内に渦福の銘。30は内面に五弁花のコンニャク印判と墨弾きによる波文、口縁に口紅装飾を施す。

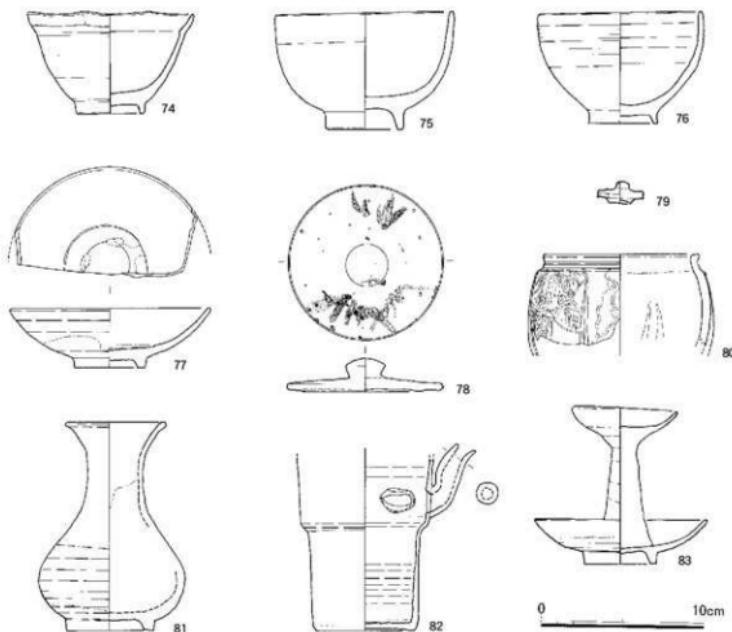


Fig.15 SX 303 出土遺物実測図 8 (1/3)

31は鉢。内面に蛸唐草文、外面に唐草文を描く。唐草は茎の輪郭を線描きし、濃みを入れる。32は油壺。二面に草文を入れる。33は小型の瓶。唐草文を描く。35は瓶。梅花文を描く。35は仏飯器で雨降文が描かれる。36は方形の水滴。

37は灰青色を呈する陶胎の染付皿。切り込みを入れて四角形にする。38は陶胎の染付碗。外面に楓文が描かれるが発色は悪く黒褐色を呈する。文見込みは蛇の目釉剥ぎされ、疊付には砂が付着する。39は灰青色を呈する染付碗。器壁は非常に厚い。外面に唐草文を描く。茎は鉄絵、葉は呉須で描かれるが発色は悪い。

40~43は肥前の色絵である。40・41はそば猪口で外面に唐子が描かれる。42は碗で外面に宝珠が二面に描かれる。43は碗で、外面に呉須と色絵で松竹梅文が描かれる。非常に丁寧な絵付けである。高台内に「大明成化年製」の銘。

44~66は肥前の刷毛目を施した陶器である。44~51は暗茶褐色の器壁に白泥による刷毛目を施す。44は蓋。内外面とも打刷毛目。45~46は碗。内面は縮縫状、外面は蓮華状の打刷毛目。47は碗で内外面とも打刷毛目。底部穿孔される。48は小杯。外面は蓮華状の打刷毛目、内面は巻刷毛目。49~58は碗。49は外面に3か所白泥を打ち、内面は縮縫状の打刷毛目。50は外面に3か所、内面に2か所離に白泥を打つ。51は内面が打刷毛目、外面は黄褐色を呈し、白泥をふき取った後に、3か所の虫手。52

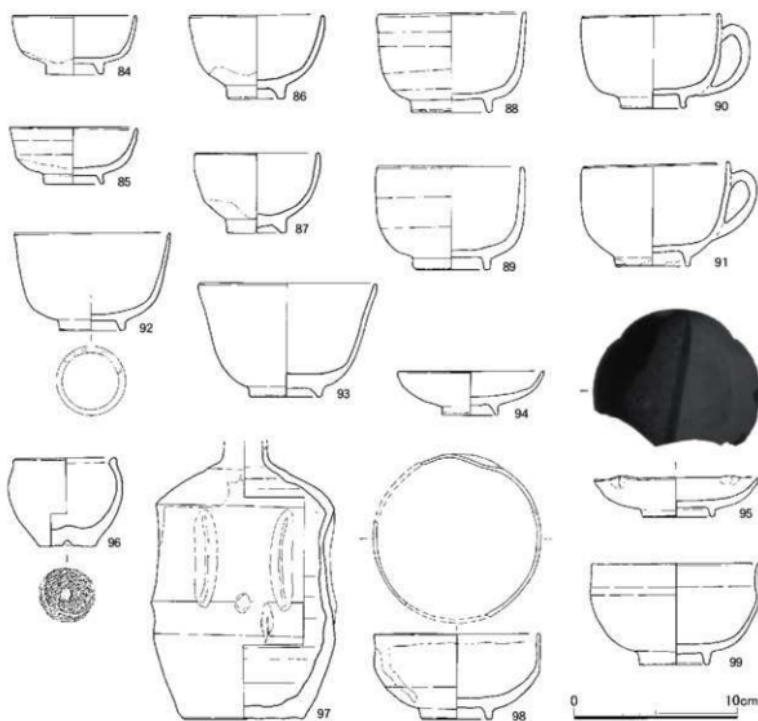


Fig.16 SX303 出土遺物実測図 9 (1/3)

は外表面とも黄褐色を呈し、白泥をふき取った後に、部分的に白泥を塗る。53はやや厚手の碗。灰青色を呈し、外面は横方向の刷毛目にて所縫線を入れる。54は暗茶褐色の器壁に内面は縮縫状、外面は波状の刷毛目。55は黄色がかった暗茶褐色を呈し、細かい貫入がある。内底に白泥を打ち、外面は波状の刷毛目。56は暗茶褐色の器壁全体に白泥を塗る。外面は4か所に蚩手を入れるが、全面塗布の白泥に隠れる。57は茶褐色の器壁に内面は縮縫状、外面下半に薄い白泥がかかる。龍虎梅林の文字を白泥で書く。58は暗茶褐色の器壁に巻刷毛目を施す。59・60は皿。59は茶褐色の器壁に内面は巻刷毛目の後、ヘラで樹枝状の文様を刻む。外面は白泥を薄く塗る。60は灰茶褐色の器壁に灰オリーブの釉がかかる。外面下半は露胎。内底は蛇の目釉剥ぎされる。内面口縁部に白泥を打つ。61は瓶。茶褐色の器壁に打刷毛目を施す。62～64は碗。62は橙白色の器壁に巻刷毛目、63・64は黄褐色の器壁に巻刷毛目。65は片口鉢。黄褐色の器壁に巻刷毛目。高台脇から高台まで露胎。内底は蛇の目釉剥ぎされる。66は鉢。黄褐色の器壁に巻刷毛目。高台は露胎。内底は蛇の目釉剥ぎされるが白泥は残っている。これららの刷毛目を施した陶器には現川焼が含まれている。

67～73は肥前の京焼風陶器。67～70は碗。高台脇から高台まで露胎。高台内に「木下弥」、「清水」、

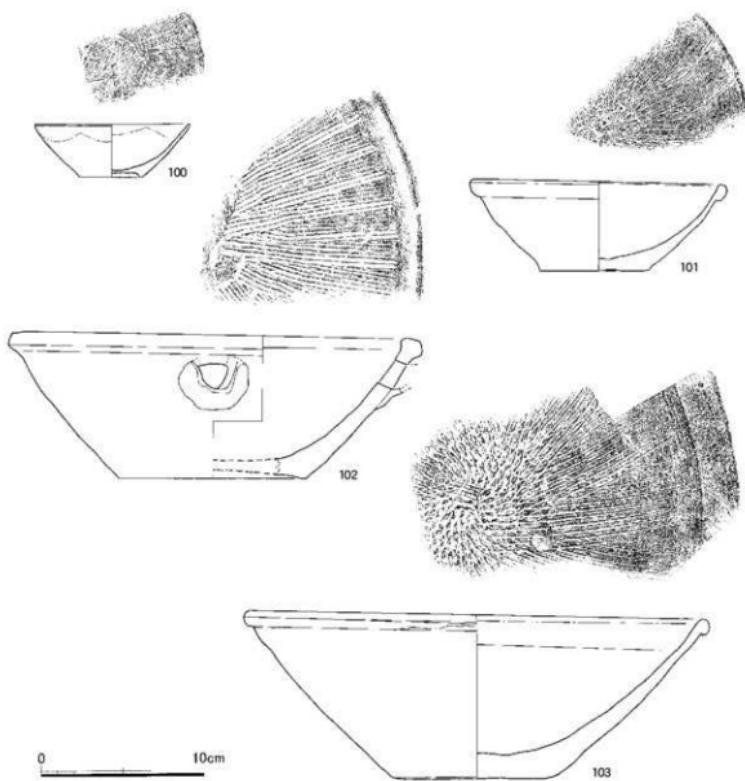
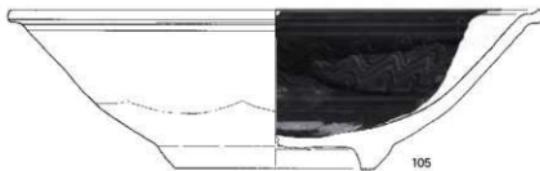
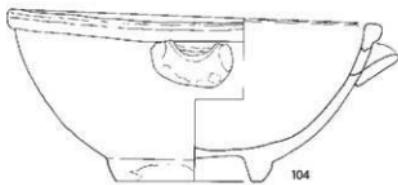


Fig.17 SX 303 出土遺物実測図 10 (1/3)

「小倉」の銘がスタンプされる。71は皿。高台内側を露胎とする。72は鉢。蛇の目高台で、高台脇から高台まで露胎。鉄絵と呉須による絵付け。73は片口鉢。高台脇から高台まで露胎。釉は白濁している。高台内に「新」の銘がスタンプされる。

74～76は灰釉陶器の碗。74は青灰色白色を呈する。口縁部は外折し、輪花とする。全面施釉され、疊付の釉を掻き取る。75は黄灰色白色を呈する。器壁は厚い。全面施釉され、疊付の釉を掻き取る。疊付に砂粒が付着する。76は浅黄色を呈するが一部発色が悪く灰色がかる。全面施釉され、疊付の釉を掻き取る。77は肥前内野山の陶器皿。内面に銅緑釉がかかり、内底を蛇の目釉剥ぎする。外面は体部上半まで透明釉がかかる。内底に目跡がある。78は陶器の蓋。鉄絵で笹文を描く。79・80は三彩陶器。79は小型の蓋。摘み部に緑釉がかかる。80は瓜形壺。緑釉の地に花文が陰刻され、黄色と紫の釉がかかる。81は灰釉陶器の小瓶。高台脇から高台まで露胎。82は陶器のチロリ。上部は鉄釉、下部は灰釉で底部は露胎。83は陶器の灯火器。高台脇から高台まで露胎。



0 10cm



0 10cm

Fig.18 S X 3 O 3 出土遺物実測図 11 (1/3・1/4*)

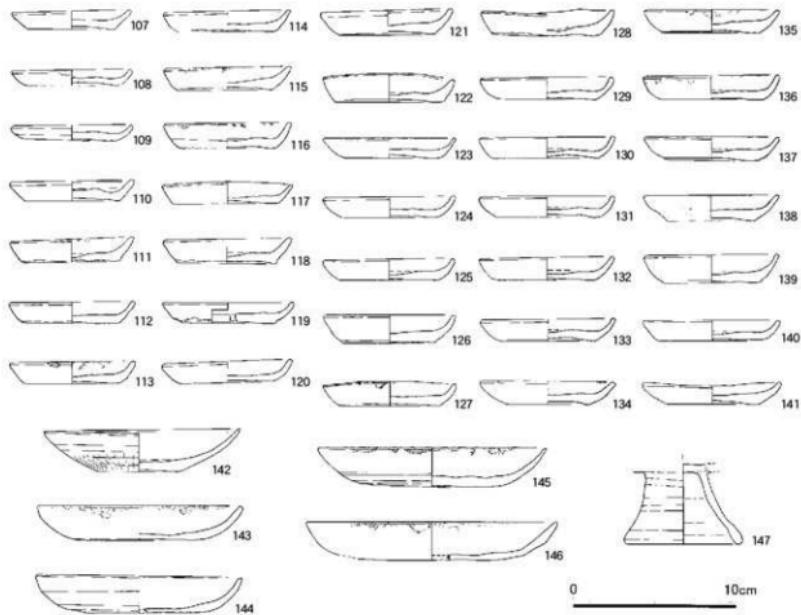


Fig.19 SX 303 出土遺物実測図 12 (1/3)

84~97は高取焼。84~87は小碗。84・85は器高が低い浅めの碗。84は灰釉陶器で体部下半は露胎。85は黒褐釉陶器で体部下半は露胎。86は黒褐釉陶器で体部下半は露胎。87は褐釉陶器で体部下半は露胎。88~93は碗。88・89は黒褐釉陶器で疊付以外全面施釉。90・91は把手が付く黒褐釉陶器碗で疊付以外全面施釉。92・93は胎釉陶器で疊付以外全面施釉。94・95は皿。94は胎釉陶器で疊付以外全面施釉。95は疊付以外全面施釉で灰釉と胎釉を掛け分けている。96は小壺。底部を除き胎釉が全面にかかり、口縁部に薺灰釉がかかる。97は竹節形瓶。底部を除き胎釉が前面にかかり、一部薺灰釉をかける。98・99は鉄泥を疊付以外に施す陶器碗。

100~103は陶器の擂鉢。100は小型品。口縁部に黒褐釉。碁笥底である。101は口縁部を玉縁にし、褐釉をかける。底部は回転糸切り。102は無釉で片口が付く。103は口縁部を玉縁にし、褐釉をかける。底部は回転糸切り。

104~106は肥前陶器の大型品。104は片口鉢。外面上半は波刷毛目、下半は褐釉で疊付から高台内部は露胎。内面は白泥を刷毛で薄く塗る。105は鉢。内面から外面体部中位まで褐釉がかかり、内面には波刷毛目。内底に大きな砂目があり、疊付には胎土目がある。106は大甕。胴部に4条の沈線が巡る。

107~147は土師器。107~141は小皿。ろくろ成型で底部は回転糸切り。口径7.3~8.5cm、器高1.0~1.8cm、底径5.4~6.8cm。108・111・113・114~116・127・134~136は燈明皿として使用されている。142~146は壺。142は灰白色を呈する。ろくろ成型で体部下半と底部は回転ケズリ。口径12.0cm、

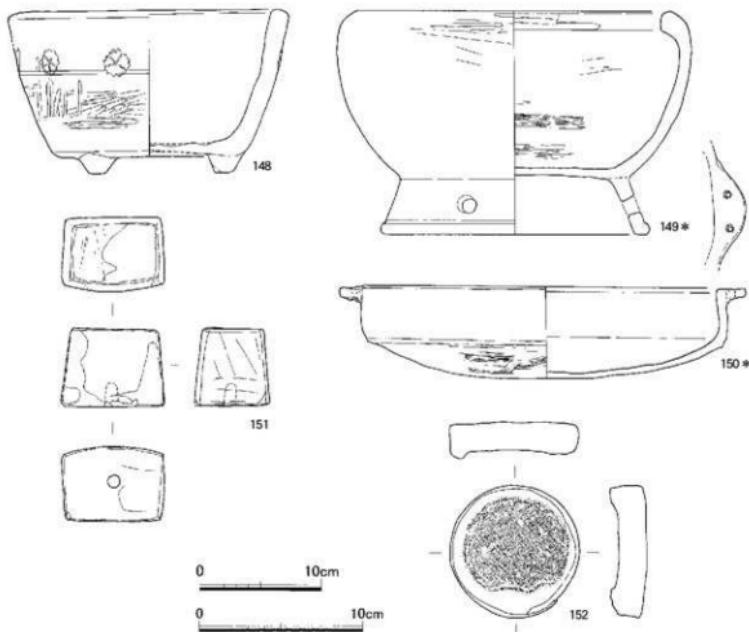


Fig. 20 S X 303 出土遺物実測図 13 (1/3・1/4*)

器高2.3~2.6cm、底径4.8cm。143~145はろくろ成型で底部は回転糸切り。体部と底部の境が不明瞭である。143は12.6cm、器高2.1cm、144は12.6cm、器高2.1~2.3cm、145は14.0cm、器高2.4cm。146は15.4cm、器高2.3cm。143・145・146は燈明皿として使用されている。147は壊の脚部である。

148は土師質土器の脚付鉢。外面体部中位に沈線を巡らし、菊花のスタンプを施す。体部下半はミガキ調整。上部は器面が剥落している。また、内面上部に煤が付着し、器面が剥落している。火消し壺か。149は土師質土器の台付鉢。口縁部は内湾する。150は土師質土器の焰鉢。外面に煤が付着している。151は台形の土製品。背面以外は平滑につくられており、前面はやや湾曲している。底部から径7mmの孔が深さ13mm穿たれる。152は焼塙壺の蓋で内面に布の圧痕が残る。

153は瓦質土器の蓋。火消し壺か。154は土師質土器の火鉢。外面口縁下に花文、体部に虎の文様をスタンプする。155は瓦質土器の火鉢。156~160は七輪のさな。土師質で大小さまざまなサイズがあり、数多く出土した。161は土師質の七輪。二重構造になっており、外壁に熱が伝わりにくくなっている。前面には焚口の窓と灰を掻き出す窓がある。内面上段には煮炊具をのせる突起、下段にさなをのせる突帯がある。162は七輪の土師質の窓の蓋。煤が付着している。160~162の組み合わせで七輪のセットとなる。

163は土師質土器の舟龜である。下部は煤で黒変している。

164~166は瓦。164は三巴軒丸瓦。165・166は押印がある瓦。165は丸瓦で「空兵衛」、166は平瓦

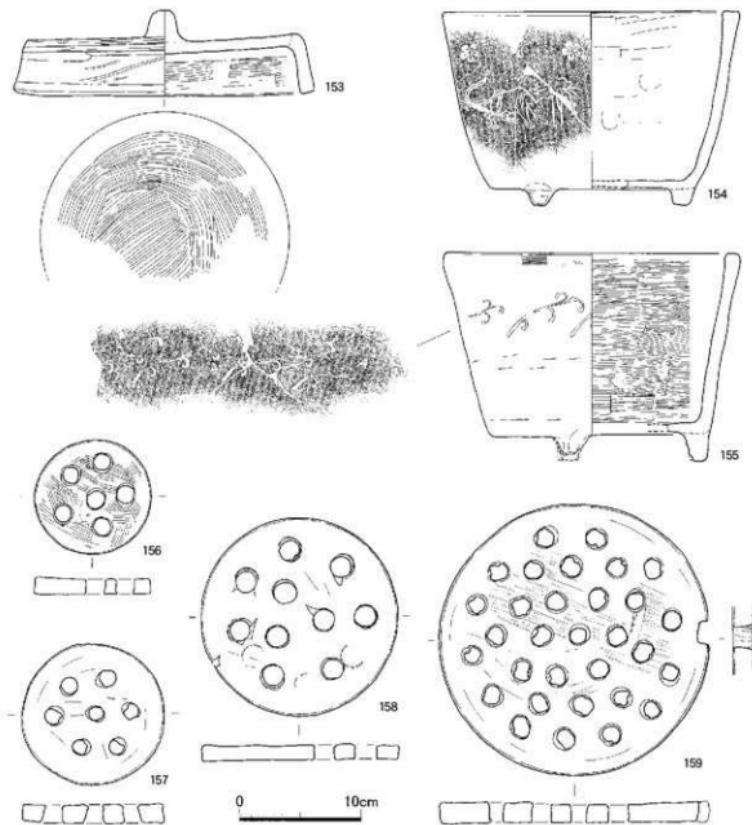


Fig.21 S X 303 出土遺物実測図 14 (1/4)

で「甚兵衛」の銘。

167は硯。淡褐色の粘板岩で陸部は使用でくぼみ、墨痕が残る。

168・169は漆椀。168は内面赤色、外面黒色の漆が塗られ、疊付は露胎である。169は内外面とも黒漆が塗られる。外面体部に金で菊花と細線が描かれ、高台内には赤漆で文字（花押？）を記す。

このほかS X 303からは数多くの陶磁器や色絵の人形などが出土している。これらの出土遺物は18世紀後半のものを中心に19世紀初頭のものを含んでいる。

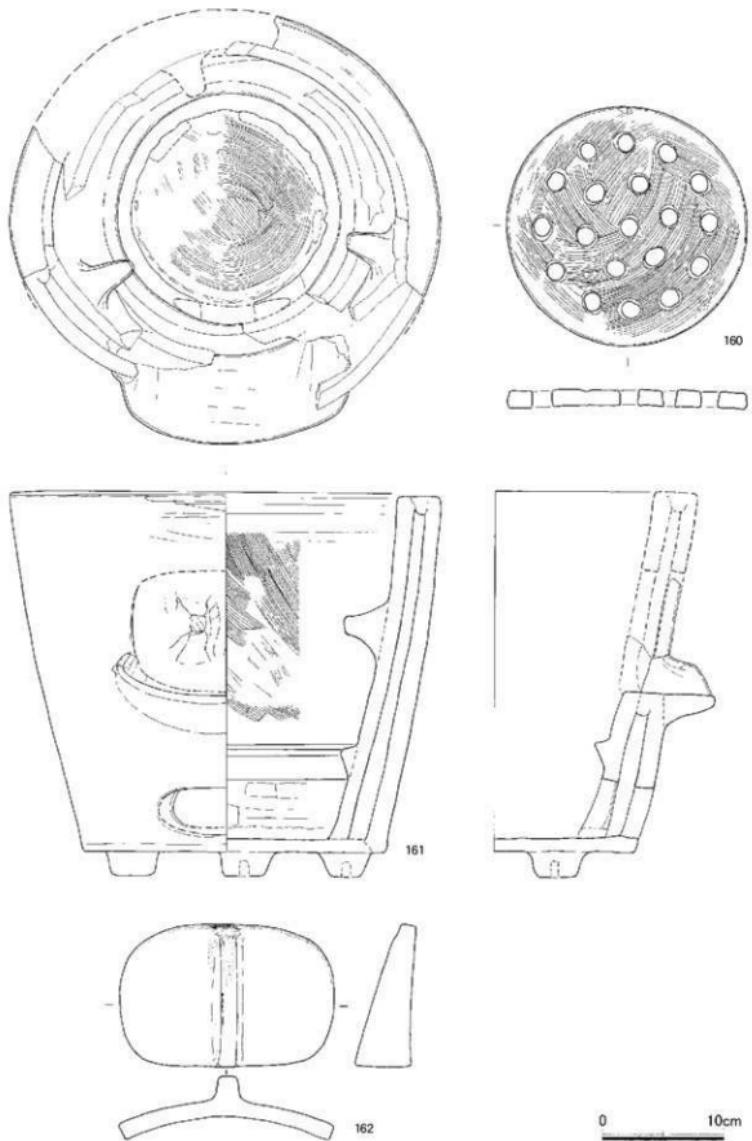


Fig.22 S X 3 O 3 出土遺物実測図 15 (1/4)

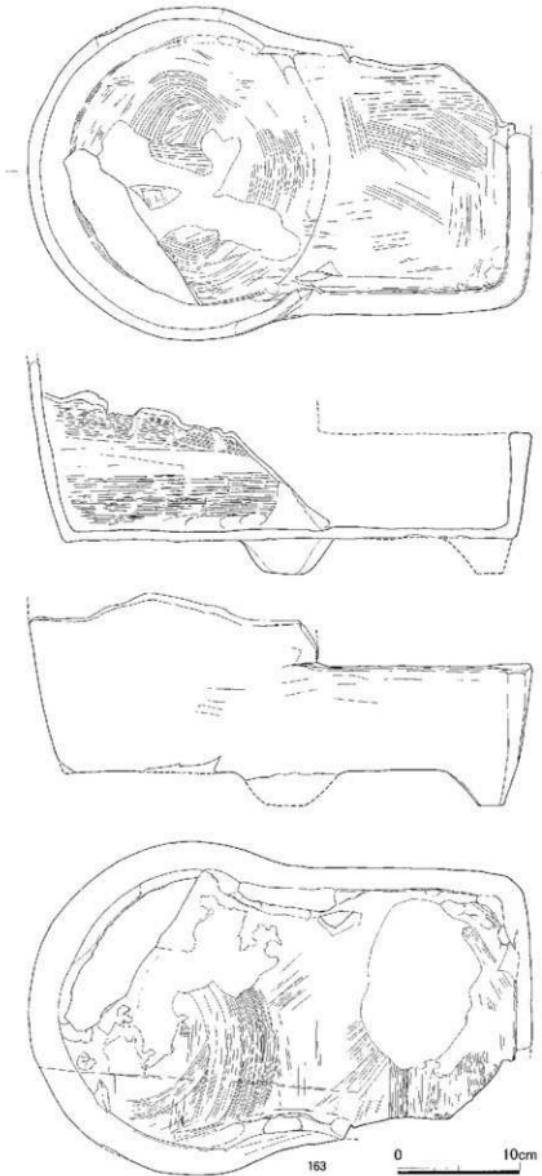


Fig.23 SX 303出土遺物実測図 16 (1/4)

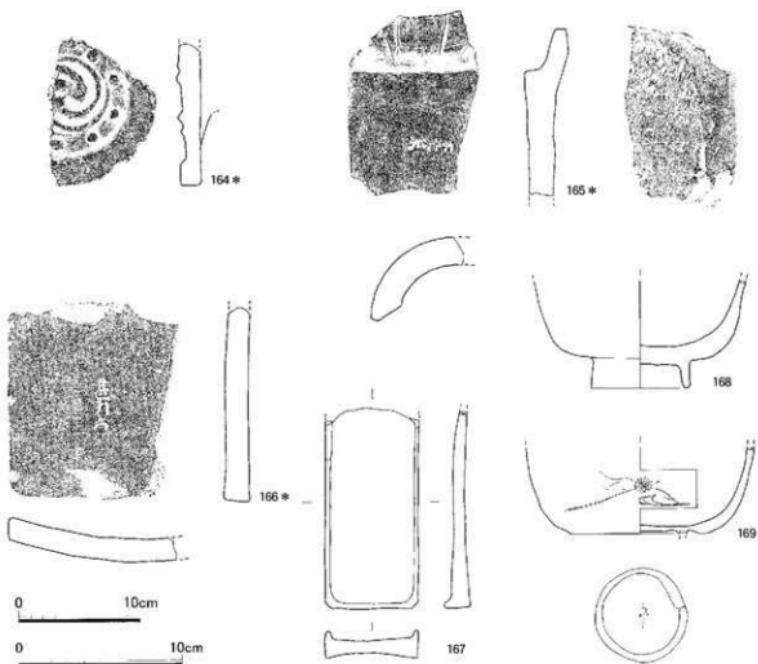


Fig.24 S X 3 0 3 出土遺物実測図 17 (1/3・1/4*)

5. 第4面の調査

第4面は自然層である砂層に下げて遺構検出を行った。標高は1.3~1.7mである。井戸1基、溝1条、土坑7基、ピット数基が検出された。



Ph.17 S E 4 0 1 (南から)



Ph.18 S E 4 0 1 木桶 (南から)

S E 4 0 1 は掘方長軸3.3m、短軸2.7mの椭円形で、東寄りに径70cmの木桶の水溜を据える。

S X 4 0 5 は径1.5mの円形土坑。瓦質の大甕の底部が据えられており、中から陶器擂鉢、綠釉大皿、寛永通貫2枚が出土した。

最下層の第4面で中世にさかのぼる遺構は発見されなかった。



Ph.19 SX 405 (西から)

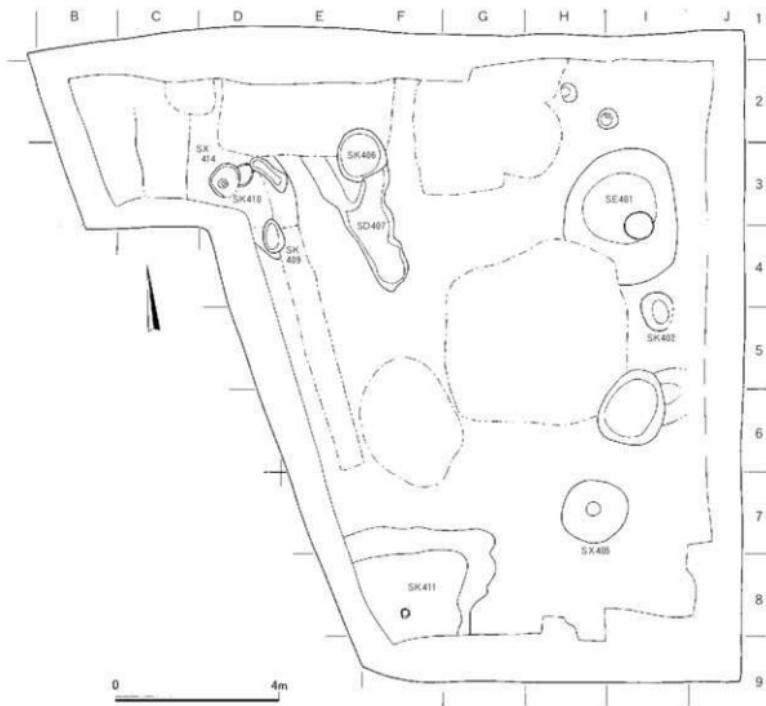


Fig.25 第4面遺構分布図 (1/120)

III ま と め

福岡城跡75次調査では4面の調査を行い、近世福岡城下町の一部を明らかにすることができた。調査地点は福岡城築城前、草香江の入り江の付け根にあたり地山は砂層であった。福岡城築城時に草香江が大堀と整備されるときに堀の土手として「杉土手」が築かれ、その北側も城下町として整備された。調査地点では自然砂層上に福岡城中心部が乗る台地から持ち込んだ頁岩風化土や砂質の土壤で整地されている。絵図によると屋敷区画の隅にあたっており、築城直後の遺構は発見されていない。

今回報告の中心となった大型廃棄土坑5×303からは大量の出土遺物があった。肥前の陶磁器を中心に、高取の陶器や在地とみられる土師質・瓦質の土器が多く出土した。18世紀後半から19世紀初頭のものが見られ、福岡藩の武士の生活の一端が明らかとなった。現川焼の出土や中世と変わらぬ土師器の小皿の出土が興味深い。

2019(平成31)年4月より絵図を参考福岡城下町遺跡の範囲を大幅に拡張している。巨大なビルが数多く建っており、遺跡が残っている部分は限られるが、今後大きな成果が得られることであろう。

報告書抄録

ふりがな 書名	ふくおかじょうあと 福岡城跡							
副書名	第75次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1402							
編著者名	田上勇一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1				TEL 092-711-4667			
発行年月日	2020年3月25日							
ふりがな 所收遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
ふくおかじょうあと 福岡城跡	ふくおかじょうあと 福岡県福岡市 ちゅうあうくあおほりこうえん 中央区大濠公園	401323	0193	33° 35' 24"	130° 20' 25"	20170711 20171020	204	事務所 ビル
所收遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
福岡城跡	集落	近世	井戸 土坑 溝	土器	陶器	陶磁器		
要約	4面の調査を行い、福岡城下町の武士の生活の一端を明らかにすることができた。 調査地点は福岡城築城時に城下町として整備されている。 大型廐棄土坑からは大量の出土遺物があり18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器の組成を明らかにすることができた。その中には肥前現川焼の良質な一群が含まれる。							

福岡城跡

- 第75次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1402集

2020年3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 新交社
福岡市中央区地行1丁目11-3

FUKUOKA CASTLE RUINS

- Results of the 75th excavation of the Fukuoka Castle Ruins -

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1402



2020

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY